

教観相依に思う

福島 光 哉

私は佛典を読んでいるとき、ふと今自分は何をしてい
るのかなという疑問におそわれて、佛典から目をそらせ
てしまうことがある。年甲斐もなく……と自省してみ
るのだが、この悪癖はなかなか癒らない。

以下に書き綴る小文は、こういった時に思い浮かぶ断
想の一部である。

× × × × ×

周知のようにここ数年來、天台学の分野において教相
判釈をめぐる論争が続いて來た。論争の発端は、天台智
顛の諸講説に、成語として「五時八教」という文句があ
るかどうかということであって、多くの先生方が加わり、
詳細に天台の文献を検討し、学界に大きな成果をもたら

して來たのである。その論争の経過や学問的成果につ
いては、すでに関口真大編著『天台教学の研究』に報告せ
られているので、ここに紹介することは避ける。ただこ
の論争が深められるにつれ、私なりの関心から天台学に
限らず広く佛教学上のいろいろな課題が提起されてきた
ように思われるので、その中から一、二の問題について
述べてみよう。

第一の問題は、関口先生の「五時八教の教判が天台智
顛の説でないことが確認された以上、今後は五時八教の
教判をもって、天台の綱要を講ずることは止めよ。」と
いう提言である。そして天台の綱要を講ずるには、五時
八教にかわって、(一)教観二門の相依、(二)教門については
四種釈と五重玄義、観門については三種止観と四種三昧、

の二項目を柱とせよ、という意味のことを主張された。

これをテキストの上で言えば、長い間わが国で、天台の入門乃至綱要として広く学ばれて来た高麗僧諦観の『天台四教儀』を捨てて、天台大師智顛の『三大部』にかえれということであり、教学内容についていえば、天台の基礎理念としては教判のみを取りあげるべきでなく、教観二門にわたって一方に偏ることなく講ぜよ、ということになろう。以上のごとき関口先生の主張に私は全面的に賛成であり、先生のご教示を深く感謝しているものである。

× × × ×

ただ私はここでいわゆる「入門」とか「綱要」という、学問遂行のための一つのステップを設定する意味について、多少の疑問をもっている。それは天台学に限らず、佛教学一般に共通する課題であろうけれども、佛教学あるいは天台学を「学」として学ぶときに、外面的にはそれなりの段階を践むことの必然性は充分理解できる。かりに大谷大学佛教学科のカリキュラムを見ても、初年次に佛教基礎学があり、二年次に佛教学基礎講読が課せられて、文字通り基礎的な法門内容の解説や、佛典解説の

基礎学力の養成につとめている。しかしこれらを講ずる者が、佛教学の初心者を対象にするからといって、法門を敢えて平易に解説したり、佛典解説の初歩的な技術を身につけさせることをもって、充分責務を果たしているとは言えない筈である。いま私が漠然と不十分ではないかとおそれている点こそ、まさしく天台の入門乃至綱要の一翼を担っている「観」そのものように思われるのである。観とは止観の観であり、内観の観である。佛教学には常にある種の「観」が伴っている。いや「観」を通してこそ佛教学の存在が確実となり、「観」に包まれた世界を指して法界というのであろう。天台智顛は経論に説かれる法門の解釈や註解に走る人を「文字の法師」と言って批判した。そして観法の体系化をはかり、その中に観法の価値批判や理念を盛り込むことによって、「観」を佛教「学」のまないたに載せた。そして経論所説の法門内容を軽視して、いたずらに自己の狭い内観のみに沈潜する人を「闍証の禪師」といって批判したのである。

当時の中国佛教学界においては、教門の研究は急速に進められており、経論の解釈は活発になされていたのであるが、観門においてはこれを組織大成し、教門との必然的なつながりに関して主体的な観法を確立することは、

殆んど見られなかった。したがって教觀二門の確立は、天台智顛の偉大な發揮であった。ところが、この教觀二門が智顛によって確立された故に、却って末学のわれわれは既に完成された法門として受け取り勝ちであり、天台を学ぶにあたってそれは既成の基礎事實であるかの如き錯覚をもち易い。果して「教觀相依」とは既に了解ずみの事實として、それを後進に伝達すべきものなのかどうか、甚だ疑問とせざるを得ない。「教觀相依」とは、確かに天台学の綱要を形成する基礎的な法門であるが、同時に「教觀相依」とは、限りなく追求されるべき天台学の究極目標でもある筈である。

× × × × ×

いま一つ、論争の過程において話題となったのは、智顛の撰述の中に「五時八教」という成語は見られなくとも、その思想は充分窺えるのではないかという反論があったことである。この議論の内容の詳細は省略するが、要するに智顛の三大部には、随处に藏通別円の四教にわたって諸法門を整理し秩序づけ、佛教の原理を説明していることは明らかである。したがって智顛に教判の思想がなかったと速断することは到底許されることではない。

そこでこのような教判思想の内容と、成語として「五時八教」が見出せないということとの関係を、どのように考えるべきか、ということである。

さて、この種の課題は天台に限らず、一般に佛教研究の場においても直面する問題であって、佛教学の方法論と密接に関わって来ることは明らかであろう。ところで天台に関して言えば、この問題は前述の「教觀相依」と重なり合つて来ると思われる。いささか飛躍するかも知れないが、たとえば天台には十如是の三転読という有名な法華經の解釈がある。この場合法華經自体について、十如是の經文が直ちに三転読できるような必然性・客観性があるとは、到底考えられない。にも拘らず智顛はこれを三転読するように教え、しかもこの三転読によって明かされる三諦説が、天台法門の根幹とされているのである。つまりわれわれが佛教学研究に際して、広く採用している客観性・必然性の追求という方法を用いている限り、十如是の三転読を了解することは困難である。したがって、天台の法門を理解する為には、少くとも文献の客観性のみを信頼するような態度は捨てなければならぬ。

そこで思われることは、十如是の三転読によって智顛

は、彼自身の「観」を「教」の上に顕現しようとしていることである。十如是の經文を三転読するなどというのは、まさしく彼の「観」の表白なのである。そしてこのように、観の内景を教学体系の上に直接明示しようとする傾向は、彼の講述にしばしば見られるところである。

もともと天台三大部の文章は、われわれに理解し易いような構造を必ずしも整えていない。文章の一行ごとと言外のふくらみがあり、余韻を残しながらつぎの新しいテーマの論述が始まるといったことも多い。少くとも三大部は、形式論理を追い、合理的思考に裏打ちされた文章ではない。飛躍というか、非合理というか、そこに言い知れぬ深みを感じさせる何かがある。その言い知れぬところが、また魅力である。

× × × ×

釈尊は菩提樹の下で冥想に入り、やがて成道された。多くの大乘經典には、世尊が深い三昧より出て始めて説法されたと説かれている。あるいは、世尊は得道より泥

洄に至るまで、常に三昧にあって説法されたともいう。このように三昧を離れて説法はないのであり、三昧即ち「観」の世界が經典となつて、われわれの前に示されたということである。とりわけ大乘經典に目立つ奇瑞の示現や神秘的な世界など、これはまさしく禪定の世界の開顯であつて、文字や文章の背後にこそ甚深広大な思想を湛えている筈である。それは經典に限らず、偉大な佛教学者の述作からもしばしば感得されることであり、またそういう三昧を具備した佛典であるからこそ、われわれの心を揺り動かすのであろう。

今日の佛教学において、教理研究は随分進展しているにも拘らず、いわゆる「観」の哲学は依然として貧弱である。明治以後の近代佛教学の輝かしい業績が、あるいはこのような一つの傷痕を残してしまったのであろうか。いずれにせよ、「教観相依」を大目標とした天台智顛の「学」の姿勢を、あらためて省みる必要があるのではな